

# いしづみ 良心の碑

## 聖書の言葉

「愛する者たち、互いに愛し合ひましょう。愛は神から出るもので、愛する者は皆、神から生まれ、神を知っているからです。愛することのない者は神を知りません。神は愛だからです。神は、独り子を世にお遣わしになりました。その方によって、わたしたちが生きようになるためです。ここに、神の愛がわたしたちの内に示されました。わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。愛する者たち、神がこのようにわたしたちを愛されたのですから、わたしたちも互いに愛し合うべきです。いまだかつて神を見た者はいません。わたしたちが互いに愛し合うならば、神はわたしたちの内にとどまってくださり、神の愛がわたしたちの内に全うされているのです。」(ヨハネの手紙4章7節～12節) (朗読：半田 久)

## 3月例会(3/6)

発表者 江澤 香  
テーマ 備中松山藩と新島襄、そして福西志計子・その2

## 山田方谷に入門

福西志計子(1848～1898)は数え年7歳で父(備中松山藩士)と死別し、母に育てられた。母は志計子を隣家の儒学者・山田方谷の私塾に入門させた。女子が入門できたのは、当時としては破格の幸運であった。

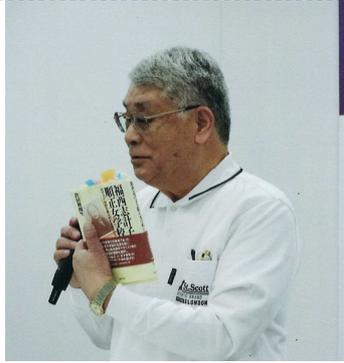
**窓** 学生時代に同志社のお隣の相国寺境内に足を踏み入れたことはなかった。当時の人気スポットは竜安寺や西芳寺、あるいは金閣寺、銀閣寺で、相国寺は臨済宗の大本山とはいえ、地味な存在だった。

今回『室町幕府論』(早島大祐著)を通じて相国寺の重みを改めて学ぶことができた。3代将軍義満が室町幕府の権威の象徴とした相国寺が完成したのは1392年。同著によると、落慶式の当日、義満は花の御所から室町通を南下した後、一条通を

東に向かい、相国寺に至ったという。

今でいえば、同志社大学の寒梅館(旧学生会館)あたりから今出川キャンパス、さらに女子大の一大帯まで、大勢の見物人で埋め尽くされたものと想像される。花の御所と相国寺は目と鼻の先のはずだが、威光を見せつけるために遠回りの行列を組んだのだろう。

1399年には相国寺の東側に都人を驚かすに十分な高さ100メートルを超す大塔が出現。落慶式には延暦寺や興福寺、東大寺



## 男女平等の考えと教職の道

男子に混ざって学問を修めた志計子は、「女であるというだけで男に劣るということはない」、「女が劣るのは学問を学ぶ機会がないためである」と考えるようになった。

明治8年(1875)、家計の保持と学の道の両立を思い立ち、教職の道を志して、木村静とともに岡山裁縫伝習所に入学した。翌9年修業を終えて高梁小学校に付属して新設された裁縫所の教師になった。

## 新島襄の宣教演説

明治12年(1879)ごろ、志計子はキリスト教に触れ、入信した。

新島襄は明治13年志計子が勤務する裁縫所でキリスト教の演説を行った。その中で、新島は「女性が抑圧されてきたこの国では女子教育を充実させることが必要です。・・・日本を文明化するためには男性はもちろん女性に対してもキリスト教に基づいた教育を充実させることが何より急務です」と説いた。

## 私設の裁縫所設立

新島の演説に感動した志計子は木村静とともにキリスト教婦人会の設立に参加した。

ところが、このことが「公職たる教師にあるまじきこと」として問題になり、志計子と木村静は裁縫所教員を辞職。そして二人は私設の裁縫所を設立した。

## 順正女学校

生徒30人で出発した裁縫所は数年で90人に増えた。明治18年(1885)文学科を設置し順正女学校に改組。岡山県で最初の女学校となった。

志計子は威厳が有り「風紀」や「躰」に厳しく「順正の父」と呼ばれた。盟友の木村静は志計子の厳しい指導に心を疲弊させた生徒のメンタルケアをを担当し「順正の母」と呼ばれた。

新島襄や福西志計子の活躍の背景に、昌平坂学問所の学統に連なる佐藤一斎、山田方谷、川田夔江らの働きがあったとは、驚きであった。



▲司会進行役：木原康博  
(文責：支倉清 写真：徳弘篤介・片桐陽)

【お詫び】『良心の碑No.84』はこちらの手違いで多くの方に未発送でしたので、今月号に同封します。

**4月例会**：見学会です。詳しくは裏面をご覧ください。

から1000人近くの僧侶が動員され、演舞などが終日繰り広げられたという。大塔は数年後に焼失したが、同志社の栄光館の近くに今も残る「上大塔之段町」という地名はこのあたりに大塔があったことを教えてくれる。

大学正門から相国寺参道を超え、啓明館(先代図書館)から女子大のキャンパスを抜けるルートは「男の花道」と呼ばれていた。このあたりに室町幕府の歴史が眠っていることを知らず、女子学生の視線ばかり気にしながら出町方面へと歩みを進

めていたとは、なんと能天気なことだったか。

わが下宿は千本北大路にあり金閣寺まで徒歩圏内だった。義満が花の御所に続いて築いた北山第のすぐそばに住んでいたことになるが、それも意識することにはなかった。

花の御所、相国寺、それに北山第とは。ほかの土地や大学では望むべくもない、じつに華麗な学生時代だったのだ。

(福岡 幸)

